

Bridgeland 安定性条件と代数多様体への応用

@sachiiimath

2024 年 1 月 20 日

概要

T.Bridgeland の論文 [1] によって構成された三角圏の Bridgeland 安定性条件と, 代数多様体上の具体的な安定性条件の計算例についてのまとめです. 未完成です.

1 導入

Bridgeland 安定性条件は, 超弦理論における Douglas-II 安定性の数学的定式化のために T.Bridgeland [Br1] により導入された概念であるが, 現在では様々な分野で応用がある. ここでは特に代数多様体上の安定性条件に関する研究をサーベイする.

2 Bridgeland 安定性条件

Bridgeland による三角圏上の安定性条件を定義する. 詳細は [1] を参照.

2.1 安定関数

まずは安定関数の定義から行う. \mathcal{A} を Abel 圏とする. $K(\mathcal{A})$ を \mathcal{A} の K 群とする.

定義 2.1.1

\mathcal{A} 上の安定関数 (stability function) とは, 群準同型 $Z : K(\mathcal{A}) \rightarrow \mathbb{C}$ であって,

$$Z(K(\mathcal{A}) \setminus \{0\}) \subset \mathbb{H} := \{r \cdot \exp(\sqrt{-1}\pi\phi(E)) \mid r \in \mathbb{R}_{>0}, \phi(E) \in (0, 1]\}.$$

を満たすものをいう. $\phi(E)$ を E の *phase* という. E の任意の真部分対象 $0 \neq F \subset E$ に対し,

$$\phi(F) < (\text{resp. } \leq) \phi(E)$$

が成立するとき, E は Z -安定 (resp. Z -半安定) (Z -stable (resp. Z -semistable)) という.

安定関数 Z は以下の条件を満たすとき, **Harder-Narasimhan 条件 (Harder-Narasimhan condition)** を満たすという: 任意の $E \in \mathcal{A} \setminus \{0\}$ に対し有限なフィルトレーション

$$0 = E_0 \subset E_1 \subset \cdots \subset E_n = E$$

であって, 任意の $i \in \{1, \dots, n\}$ に対し $F_i := E_i/E_{i-1}$ は Z -半安定であり,

$$\phi(E_1) > \cdots > \phi(E_n)$$

を満たすようなものが存在する.

2.2 t-構造

次に三角圏の t -構造とその核を定義する. \mathcal{T} で三角圏を表す.

定義 2.2.1

\mathcal{T} 上の **t-構造 (t-structure)** とは, 充満部分圏 $\mathcal{T}^{\leq 0} \subset \mathcal{T}$ であって以下の条件を満たすもののことをいう:

- (i) $\mathcal{T}^{\leq 0}[1] \subset \mathcal{T}^{\leq 0}$.
- (ii) $\mathcal{T}^{\geq 1} := \{F \in \mathcal{T} \mid \forall G \in \mathcal{T}^{\leq 0}, \text{Hom}_{\mathcal{T}}(G, F) = 0\}$ と定義する. このとき, 任意の $E \in \mathcal{T}$ に対し, $G \in \mathcal{T}^{\leq 0}$ および $F \in \mathcal{T}^{\geq 1}$ であって

$$G \longrightarrow E \longrightarrow F \longrightarrow G[1]$$

が完全三角形となるようなものが存在する.

t -構造 $\mathcal{T}^{\leq 0} \subset \mathcal{T}$ の核 (core, heart) とは, 部分圏

$$\mathcal{T}_H := \mathcal{T}^{\leq 0} \cap \mathcal{T}^{\geq 1}[1] \subset \mathcal{T}$$

をいう.

t -構造の核は Abel 圏となることが知られている (cf.[9]). 上の定義と同じ状況を考える.

$$\mathcal{T} = \bigcup_{i,j \in \mathbb{Z}} \mathcal{T}^{\leq 0}[i] \cap \mathcal{T}^{\geq 1}[j]$$

が成立するとき, t -構造 $\mathcal{T}^{\leq 0}$ は**有界**であるという. t -構造の核 $\mathcal{T}_H \subset \mathcal{T}$ に対して K-group の同型

$$K(\mathcal{T}_H) \cong K(\mathcal{T})$$

が成立する. 以上の準備を以って, 三角圏の安定性条件を定義することが可能となる.

定義 2.2.2 (三角圏の安定性条件)

三角圏 \mathcal{T} 上の**安定性条件 (stability condition)** とは, \mathcal{T} の t -構造 $\mathcal{T}^{\leq 0}$ における核 \mathcal{T}_H および Harder-Narasimhan 条件を満たす \mathcal{T}_H 上の安定関数 Z の組 (Z, \mathcal{T}_H) をいう. このとき Z を**中心電荷 (central charge)** という.

\mathcal{T} 上の安定性条件 (Z, \mathcal{T}_H) および $n \in \mathbb{Z}$ と $\phi' \in (0, 1]$ に対し, \mathcal{T} の部分圏

$$\mathcal{P}(n + \phi') := \{E \in \mathcal{T} \mid E[-n] \in \mathcal{T}_H \text{ は } Z\text{-半安定 かつ } \phi(E[-n]) = \phi'\}$$

を考える.

補題 2.2.3

三角圏 \mathcal{T} に安定性条件を与えることと, 以下の条件を満たす組 $(Z, \{\mathcal{P}(\phi)_{\phi \in \mathcal{R}}\})$ を与えることは同値:

- (i) 各 $\mathcal{P}(\phi)$ は \mathcal{T} の部分圏であって, $\mathcal{P}(\phi+1) = \mathcal{P}(\phi)[1]$ となる.
- (ii) ϕ_1, ϕ_2 を $\phi_1 > \phi_2$ を満たす任意の実数とする. このとき任意の $E_1 \in \mathcal{P}(\phi_1)$, $E_2 \in \mathcal{P}(\phi_2)$ に対し $\text{Hom}_{\mathcal{T}}(E_1, E_2) = 0$.
- (iii) Z は群準同型写像 $Z: K(\mathcal{T}) \rightarrow \mathbb{C}$ で, 任意の $E \in \mathcal{P}(\phi) \setminus \{0\}$ に対して $Z(E) \in \mathbb{R}_{>0} \exp(\sqrt{-1}\pi\phi)$.
- (iv) 任意の $E \in \mathcal{T}$ に対し, $l \in \mathbb{N}$ と実数列 $\phi_1 > \phi_2 > \dots > \phi_l$ および完全三角形が存在し, 各 $i \in \{1, \dots, l\}$ について $A_i \in \mathcal{P}(\phi_i)$ が成り立つ.

証明: [1] Proposition 5.3 参照. ■

\mathcal{T} の部分圏の族 $\{\mathcal{P}(\phi)\}_{\phi \in \mathbb{R}}$ を三角圏 \mathcal{T} のスライシング (slicing) と呼ぶ.

補題 2.2.4 ([1] Lemma 5.2)

$\sigma := (Z, \{\mathcal{P}(\phi)_{\phi \in \mathbb{R}}\})$ を三角圏 \mathcal{T} 上の安定性条件とする. このとき, 任意の $\phi \in \mathbb{R}$ に対して $\mathcal{P}(\phi)$ は Abel 圏である.

以降, しばしば $\sigma := (Z, \{\mathcal{P}(\phi)_{\phi \in \mathbb{R}}\})$ と略記する. $\mathcal{P}(\phi)$ に属する対象は σ の位相 ϕ における半安定対象と呼ばれ, 特にそれが $\mathcal{P}(\phi)$ の単純対象であるとき安定対象という.

2.3 安定空間と複素構造

\mathcal{D} を三角圏とする.

3 代数多様体上の安定性条件

ここでは \mathbb{C} 上の非特異射影曲面 X の導来圏に対する安定性条件を考える.

3.1 一般論

準備として, 一般の代数多様体 X およびその接続層の導来圏 \mathcal{D} に対して成り立つことをいくつか挙げておく. 一般に K 群 $K(\mathcal{D})$ は多くの場合有限生成にならないため, 技術的な構成を介する必要がある.

一般の三角圏 \mathcal{T} に対し, 有限生成 Abel 群 Γ と, $\Gamma_{\mathbb{R}} := \Gamma \otimes_{\mathbb{Z}} \mathbb{R}$ および $\Gamma_{\mathbb{R}}$ 上のノルム $\|\cdot\|_{\mathbb{R}}$, 群準同型写像 $cl : K(\mathcal{T}) \rightarrow \Gamma$ をそれぞれ一つ固定する. 以降 $Z : \Gamma \rightarrow \mathbb{C}$ は cl との合成と解釈する. X および \mathcal{D} に対しては, Chern 指標 $ch : K(X) \rightarrow H^{2*}(X, \mathbb{Q})$ を用いて $\Gamma := \text{Im } ch$, $\text{Im}(ch)$, $cl = ch$ とおけば上の状況と整合する (cf. xx/.xx).

定義 3.1.1

(i) $D^b(X)$ の対象 E, F に対し, 以下で定まる式を **Euler 形式 (Euler form)** という:

$$\chi(E, F) = \sum_i (-1)^i \dim_{\mathbb{C}} \text{Hom}_{D^b(X)}(E, F[i]).$$

(ii) $K(X)$ の部分群 $K(X)^{\perp} := \{[E] \in K(X) \mid \forall [F] \in K(X), \chi([E][F]) = 0\}$ による商,

$$K(X)/K(X)^{\perp}$$

を X の数値的 K 群 (numerical K-group) と呼ぶ.

後に使う定理を与えておく.

定理 3.1.2 (Hilzeburch-Riemann-Roch の定理)

$\alpha \in K(X)$ に対し,

$$\chi(\alpha) = \int_X ch(\alpha) \cdot td(X)$$

が成立する. ここで $ch(\alpha)$ は α の Chern 指標, $td(X)$ は X の Todd 類である.

3.2 非特異射影曲面の安定性条件

以降, 断りのない限り X を \mathbb{C} 上の非特異射影曲面とする. $[E] \in K(X)$ に対し, その Chern 指標は

$$\mathrm{ch}([E]) := (\mathrm{rank}([E]), c_1([E]), \mathrm{ch}_2([E])) \in \mathcal{N}(X)$$

によって与えられるのだった. ここで $\mathcal{N}(X) := \mathbb{Z} \oplus \mathrm{NS}(X) \oplus \frac{1}{2}\mathbb{Z}$ である. 以下は Hilzebruch-Riemann-Roch の定理の帰結である. Chern 指標 $\mathrm{ch} : K(X) \hookrightarrow H^{2*}(H, \mathbb{Q})$ は X の数値的 K 群 $K(X)/K(X)^\perp$ から $\mathcal{N}(X)$ への単射を誘導する. 以下で定まる閉 2 形式は $\mathcal{N}(X)$ 上の**向井内積 (Mukai inner product)** という: $E_1, E_2 \in D^b(X)$ に対し

$$\langle \mathrm{ch}(E_1), \mathrm{ch}(E_2) \rangle_M = \langle (r_1, c_1([E_1]), s_1), (r_2, c_1([E_2]), s_2) \rangle := c_1(E_1) \cdot c_1(E_2) - r_1 s_2 - r_2 s_1.$$

この双線形形式と $\mathcal{N}(X)$ の組 $(\mathcal{N}(X), \langle \cdot, \cdot \rangle_M)$ は符号数 $(2, \rho)$ の格子であり, **向井格子 (Mukai lattice)** と呼ぶ. ここで $\rho \geq 1$ は X のピカル数である.

定義 3.2.1

三角圏 \mathcal{T} 上の安定性条件 $\sigma := (Z, \mathcal{T}_H)$ に対し,

- (i) σ が**数値的 (numerical)** とは, 中心電荷 Z が以下を満たすことをいう: ベクトル $\pi(\sigma) \in \mathcal{N}(X) \otimes \mathbb{C}$ が存在し, 任意の $[E] \in K(X)$ に対し

$$Z(E) = \langle \pi(\sigma), \mathrm{ch}(E) \rangle_M$$

と書ける.

- (ii) σ が**局所有限 (locally finite)** とは, 任意の $\phi \in \mathbb{R}$ に対しある $\epsilon \in \mathbb{R}$ があり, $\mathcal{P}(\phi - \epsilon, \phi + \epsilon)$ が有限の長さを持つことをいう.

二つ目の条件である局所有限の意味は, 多くの場合安定性条件の空間は無限次元になってしまうため, 有限なものへと制限するための条件である.

$D^b(X)$ 上の数値的で局所有限な安定性条件の全体を $\mathrm{Stab}(X)$ とおき, **安定空間 (stable space)** という. よく知られているように, $\mathrm{Stab}(X)$ には複素多様体の構造が入る. 定義 3.2.1(i) の写像 $\pi : \mathrm{Stab}(X) \rightarrow \mathcal{N}(X) \otimes \mathbb{C}$ は複素多様体としての正則写像である. $D^b(X)$ の有界な t -構造の核 \mathcal{T}_H を固定し,

$$\mathrm{Stab}(\mathcal{T}_H) := \{\sigma' = (Z', \mathcal{T}_{H'}) \in \mathrm{Stab}(X) \mid \mathcal{T}_{H'} = \mathcal{T}_H\}$$

と定義する.

3.3 安定空間への群作用

非特異射影多様体 X に関する安定性条件の具体的な計算の前に, $\mathrm{Stab}(X)$ への自然な群作用について記述する. \mathbb{R} 上の一般線形群 $GL(n, \mathbb{R})$ の部分群,

$$GL^+(n, \mathbb{R}) = \{T \in GL(n, \mathbb{R}) \mid \det T > 0\}$$

を考え, その普遍被覆を $\widetilde{GL^+(n, \mathbb{R})}$ とする. $\widetilde{GL^+(n, \mathbb{R})}$ は $T \in GL(n, \mathbb{R})$ および, 以下を満たす単調増加関数 $f : \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ で以下を満たすものの組 (T, f) 全体とすることができる:

- (i) 全ての $x \in \mathbb{R}$ に対し $f(x+1) = f(x) + 1$.
(ii) 同一視 $S^1 = \mathbb{R}/2\mathbb{Z} = \mathbb{R}^2 \setminus \{(0, 0)\} / \mathbb{R}_{>0}$ によって, f と T が S^1 に誘導する写像は等しい.

(cf. xx.xx).

ここで $\sigma := (Z_\sigma, \mathcal{P}_\sigma) \in \text{Stab}(X)$ および $g := (T, f) \in \widetilde{GL^+(n, \mathbb{R})}$ に対して, $Z_{\sigma g} = T^{-1} \circ Z_\sigma$, $\mathcal{P}_{\sigma g} = \mathcal{P}_\sigma(f(\phi))$ と定める. また, \mathbb{C} を実 2 次元の空間と同一視することで T^{-1} を作用させる.

命題 3.3.1

$\sigma g = (Z_{\sigma g}, \mathcal{P}_{\sigma g})$ は命題 2.2.3 を満たす. すなわち $\sigma g \in \text{Stab}(X)$.

証明:

したがって, 位相空間 $\text{Stab}(X)$ への $\widetilde{GL^+(n, \mathbb{R})}$ の右作用:

$$\text{Stab}(X) \times \widetilde{GL^+(n, \mathbb{R})} \longrightarrow \text{Stab}(X)$$

が定まる. この作用を用いて $\text{Stab}(X)$ の GIT によるモジュライ空間を構成したい. そこで, この作用の軌道による同値関係を定義する.

定義 3.3.2

$\sigma, \sigma' \in \text{Stab}(X)$ が $\widetilde{GL^+(n, \mathbb{R})}$ - *equivalence* とは, σ および σ' が同じ単一の $\widetilde{GL^+(n, \mathbb{R})}$ -軌道に含まれることをいう.

ここで, $T \in GL^+(n, \mathbb{R})$ に対し $T \mapsto \text{id}_{\mathcal{N}(X)} \otimes T^{-1}$ と定めることで, $GL^+(n, \mathbb{R})$ から $\mathcal{N}(X) \otimes \mathbb{C}$ への作用を定めておく. したがって, 被覆写像を経由して $\widetilde{GL^+(n, \mathbb{R})}$ は $\mathcal{N}(X) \otimes \mathbb{C}$ へ作用する. 写像 $\pi : \text{Stab}(X) \rightarrow \mathcal{N}(X) \otimes \mathbb{C}$ はこの写像と一致する.

3.4 壁

4 具体例

4.1 種数 1 以上の曲線上の安定性条件

この節では種数 1 以上の非特異射影曲線上の安定性条件について述べる. 詳細は [4] を参照. C の接続層の導来圏 $D^b(C)$ の K 群 $K(C)$ は有限階数にならず, したがって前節で述べたようにその安定性条件 $\text{Stab}(D^b(C))$ は無限次元である. そこで, 定義 3.2.1(ii) で定義した局所有限性を課す必要がある. よって以下では局所有限な $\text{Stab}(D^b(C))$ の部分多様体 $\text{Stab}(C)$ を議論の対象とする.

蛇足だが, [4] には \mathbb{C} 線形な三角圏上の例外対象およびその変異を用いた t 構造の核の構成方法が示されており, それを用いて射影直線上の安定性条件の空間 $\text{Stab}(D^b(\mathbb{P}^1))$ が単連結であることが導かれている. 折を見てその内容にも触れたい.

以下は, [4] の主結果の一つである.

定理 4.1.1 (E. Macri)

C を $g(C) > 0$ の非特異射影曲線とする. このとき, $\overline{GL^+}(2, \mathbb{R})$ による $\text{Stab}(C)$ への作用は自由かつ推移的である. したがって,

$$\text{Stab}(C) \cong \overline{GL^+}(2, \mathbb{R}) (\cong \mathbb{C} \times \mathcal{H}).$$

ここで \mathcal{H} は複素上半平面である.

この証明を見るために, $\text{Stab}(C)$ を調べるうえで基本的な補題を与える.

補題 4.1.2 ([5] Lemma 7.2)

C を種数 $g > 0$ を満たす非特異射影曲線とする. E を $\text{Coh}(C)$ の対象であって, $\text{Hom}^{\leq 0}(F, G) = 0$ を満たすよ

うな三角形

$$F \longrightarrow E \longrightarrow G \longrightarrow F[1] \quad (1)$$

が存在するものとする。このとき, $F, G \in \text{Coh}(C)$ が成立する。

証明 (定理 4.1.1):

4.2 楕円曲線上の安定性条件

前節の E. Macri の結果によって, 種数 1 以上の曲線上の安定空間は完全に決定できることが分かったが, それより以前に [1] では楕円曲線に対して個別に前節と同様の位相同型が示されていた。この節ではそれに触れたい。主な参考文献は [1] および [6] §11.4.

\mathbb{C} 上の楕円曲線 C を考える。 C の K -群 $K(C)$ に対し, その Chern 指標 $\text{ch} : K(C) \rightarrow H^{2*}(C, \mathbb{Q})$ が $[E] \mapsto (\text{rank} E, \deg E)$ によって与えられ, 従って $\text{Im ch} = \mathbb{Z} \oplus \mathbb{Z}$ である。これらのペア $(\text{Im ch}, \text{ch})$ を考える。ここで,

$$Z_0((r, d)) = -d + \sqrt{-1}r$$

と定義する。すると $\sigma_0 := (Z_0, \text{Coh}(C))$ は C 上の安定性条件である (cf.)。

定理 4.2.1 (Bridgeland)

$\widetilde{GL}^+(2, \mathbb{R})$ による右作用 $g := (T, f) \mapsto \sigma_0 g$ は位相同型

$$\widetilde{GL}^+(n, \mathbb{R}) \cong \text{Stab}(C)$$

を与える。

証明:

4.3 線織曲面の安定性条件

線織曲面とは, 滑らかな曲線 C 上の階数 2 の局所自由層 \mathcal{E} による \mathbb{P}^1 -束 $\mathbb{P}(\mathcal{E}) \rightarrow C$ をいう。このうち有理的なもの (\mathbb{P}^2 と双有理なもの) を有理線織曲面といい, そうでないものを非有理線織曲面という。非有理な線織曲面は C の種数 $g_C \geq 1$ の時に与えられることが知られている。Chern 指標の計算に有用な補題を与えておく。

補題 4.3.1

$\pi : X := \mathbb{P}(\mathcal{E}) \rightarrow C$ を非有理な線織曲面とする。このとき,

$$c_1(X)^2 = 8(1 - g_C).$$

ここで $c_1(X)$ は直線束 $\mathcal{O}_X(1)$ の第 1 Chern 類, $c_1(X)^2$ はその自己交点数, $g_C := \dim_{\mathbb{C}} H^1(C, \mathcal{O}_C)$ は C の幾何種数である。

証明: Noether の公式 (xx.xx), および $K_X^2 = 8(1 - g)$ を用いると,

$$1 - g = \frac{1}{2}(8(1 - g) - c_2)$$

したがって,

$\pi^* \mathcal{E} = \mathcal{O}_X(1)$ である。よって $\text{ch}(\pi^* \mathcal{E}) = 1 + c_1(X) + \frac{1}{2}(c_1(X)^2) = 1 + c_1(X) + \frac{8(1-g_C)}{2} = 1 + c_1(X) + 4 - 4g_C$.
 $\text{ch}(p_i^* \mathcal{E}) = (1, c_1(X), 4(1 - g_C))$.

4.4 Abel 曲面の安定性条件

X を Abel 曲面とする (代数群であるような射影多様体 Abel 曲面といった). ここでは Abel 曲面の安定性条件を求める. この節の内容は [10] および [6] §11.7 の内容に準ずる.

4.4.1 準備: Giesker-丸山安定性

大雑把に, 曲面上の層にある種の条件を付加したものに対するモジュライ空間の存在を示したものが Giesker-丸山の定理であり, そこで用いられる概念が Giesker-丸山安定性である.

X を非特異射影多様体とする. X 上の非常に豊富な因子 $\omega := \mathcal{O}_X(1)$ と X の組 (X, ω) を偏極 (polarise) 射影多様体という. \mathcal{O}_X 加群 \mathcal{F} の双対層は $\mathcal{F}^\vee := \text{Hom}_{\mathcal{O}_X}(\mathcal{F}, \mathcal{O}_X)$ と定義された. また $\mathcal{F}^{\vee\vee}$ を \mathcal{F} の二重双対 (double dual) といい, $\mathcal{F}^{\vee\vee} \cong \mathcal{F}$ が成立するとき \mathcal{F} は反射的層 (reflexiv sheaf) と呼ばれる. 振れない \mathcal{O}_X 加群 \mathcal{F} の部分層 \mathcal{G} で, 商層 \mathcal{F}/\mathcal{G} が振れを持たないとき \mathcal{G} は飽和部分層 (staturated subsheaf) という.

定義 4.4.1

(i) 偏極射影多様体 (X, ω) および $\mathcal{F} \in \text{Coh}(X)$ に対し,

$$\mu_\omega(\mathcal{F}) := \frac{c_1(\mathcal{F}) \cdot \omega^{d-1}}{\text{rank}(\mathcal{F})}$$

を \mathcal{E} の傾斜 (slope) という. ただし $\text{rank}(\mathcal{E}) = 0$ のとき $\mu_\omega(\mathcal{E}) = \infty$ と定義する.

(ii) $\mathcal{F} \in \text{Coh}(X)$ が任意の真部分層 $0 \subsetneq \mathcal{E} \subsetneq \mathcal{F}$ に対して

$$\mu_\omega(\mathcal{E}) < (\text{resp. } \leq) \mu_\omega(\mathcal{F}/\mathcal{E})$$

を満たすとき, μ_ω 安定 (半安定) であるという.

4.4.2 振れ対と傾斜

一般に代数多様体 X の次元が 2 以上の場合, 標準的な t 構造 $\text{Coh}(X)$ をとることが出来ない. そこで Abel 圏の振れ対 (torsion pair) と傾斜 (tilting) という概念を用いて t 構造を作る.

定義 4.4.2

\mathcal{A} を Abel 圏とする. \mathcal{A} の部分圏の組 $(\mathcal{T}, \mathcal{S})$ が振れ対 (torsion pair) とは, 以下の 2 条件を満たすことをいう:

(i) $\text{Hom}(\mathcal{T}, \mathcal{S}) = 0$.

(ii) 任意の $F \in \text{Ob}(\mathcal{A})$ に対し, 完全列

$$0 \longrightarrow E \longrightarrow F \longrightarrow G \longrightarrow 0$$

となるような $E \in \text{Ob}(\mathcal{T}), G \in \text{Ob}(\mathcal{S})$ が存在する.

例 4.4.3

代数多様体 X 上の振れ層のなす圏 $\mathcal{T} \subset \text{Coh}(X)$, 振れの無い層 $\mathcal{S} \subset \text{Coh}(X)$ の対 $(\mathcal{T}, \mathcal{S})$ は振れ対である.

一般に三角圏 \mathcal{D} に対し, t 構造の核 \mathcal{A} とその振れ対が与えられると, そこから傾斜 (tilting) と呼ばれる別の Abel 部分圏を作り出すことができる. 具体的には以下のように構成する (詳しくは, Happel-Reiten-Smalø. [11] を参照). $\mathcal{A} \subset \mathcal{D}$ でのコホモロジー的関手を \mathcal{H}_A^i と表す. $\tau_{\leq 0}\mathcal{D}, \tau_{\geq 1}\mathcal{D}$ を §2 で定義したものとする. $\tau_{\leq 0}(T) \in \tau_{\leq 0}\mathcal{D}$ に対して

$$\tau_{\geq 0}(T) := \tau_{\geq 1}(T[-1])[1]$$

と定めると

$$\mathcal{H}_A^i(T) = \tau_{\leq 0}(\tau_{\geq 0}(T))$$

であることが分かる. 実際,

(複体の遷移のお絵描きを入れる)

である.

命題 4.4.4

三角圏 \mathcal{D} に対してその有界な t 構造の核を $\mathcal{A} \subset \mathcal{D}$ とする. \mathcal{A} の捩れ対 $(\mathcal{T}, \mathcal{S})$ に対し,

$$\mathcal{A}^\sharp := \{E \in \text{Ob}(\mathcal{D}) \mid \mathcal{H}_A^0(E) \in \mathcal{T}, \mathcal{H}_A^{-1}(E) \in \mathcal{S}, \mathcal{H}_A^i(E) = 0, (i \neq 0, -1)\}$$

と定める. このとき \mathcal{A}^\sharp は \mathcal{D} の t 構造の核である. 特に \mathcal{A}^\sharp は Abel 圏である. ■

証明:

定義 4.4.5

命題 4.4.4 における \mathcal{A}^\sharp を \mathcal{A} の傾斜 (tilting) という.

4.4.3 捩れ安定性

X を滑らかな射影多様体とする. Abel 圏の傾斜を用いて具多的に $D^b(X)$ の t 構造の核を構成しよう.

$\text{Amp}(X)$ で X の ample cone を表し, $\text{Amp}(X)_{\mathbb{R}} := \text{Amp}(X) \otimes_{\mathbb{Z}} \mathbb{R}$ とする. 同様に $\text{NS}(X)$ で X の Neron-Severi 群を表し, $\text{NS}(X)_{\mathbb{R}} := \text{NS}(X) \otimes_{\mathbb{Z}} \mathbb{R}$ とする.

$$\mathcal{A}(X)_{\mathbb{C}} := \{B + \sqrt{-1}\omega \in \text{NS}(X) \otimes_{\mathbb{Z}} \mathbb{C} \mid B, \omega \in \text{ns}_{\mathbb{R}}, \omega \text{ は豊富因子}\}$$

と定める.

定義 4.4.6 (B -twisted Chern character)

$B \in \text{NS}(X)_{\mathbb{R}}, \mathcal{E} \in D^b(X)$ に対し,

$$\text{ch}^B(\mathcal{E}) := \exp(-B)\text{ch}(\mathcal{E}) \in H^{2*}(X, \mathbb{R})$$

を B -捩り Chern 標数 (B -twisted Chern character) という. $\text{ch}^B(\mathcal{E})$ の $H^i(X, \mathbb{R})$ 部分を $\text{ch}_i^B(\mathcal{E})$ と表す.

これを用いて, μ_{ω} を以下のように少し修正する: $\beta \in \text{NS}(X)_{\mathbb{R}}, \omega \in \text{Amp}(X)_{\mathbb{R}}$ とする. X 上の捩れない層 $\mathcal{F} \in \text{Coh}(X)$ に対して以下のように定める:

$$\mu_{\beta, \omega}(\mathcal{F}) := \frac{\text{ch}_1^B(\mathcal{F}) \cdot \omega^{d-1}}{\text{rank}(\mathcal{F})}.$$

命題 4.4.7

$$\mu_{\beta, \omega}(\mathcal{E}) = \mu_{\omega} - B\omega^{d-1}.$$

証明: 補題 4.4.8 と式 (4.4.3) より,

$$\mu_{\beta, \omega}(\mathcal{F}) = \frac{\text{ch}_1(\mathcal{F})\omega^{d-1} - \text{ch}_0(\mathcal{F})B\omega^{d-1}}{\text{rank}(\mathcal{F})}.$$

したがって, $\text{ch}_0(\mathcal{F}) = \text{rank}(\mathcal{F})$ であることに注意すれば,

$$\begin{aligned} \mu(\mathcal{F}) - B\omega^{d-1} &= \frac{\text{ch}_1(\mathcal{F})\omega^{d-1}}{\text{rank}(\mathcal{F})} - \frac{\text{rank}(\mathcal{F})B\omega^{d-1}}{\text{rank}(\mathcal{F})} \\ &= \frac{\text{ch}_1(\mathcal{F})\omega^{d-1} - \text{ch}_0(\mathcal{F})B\omega^{d-1}}{\text{rank}(\mathcal{F})} \\ &= \mu_{\beta, \omega}(\mathcal{F}). \end{aligned}$$

補題 4.4.8

通常の意味での Chern 指標 ch および定義 4.4.6 の Chern 指標 ch^B に対し, 関係式

$$ch_0^B = ch_0, ch_1^B = ch_1 - Bch_0, ch_2^B = ch_2 - Bch_1 + \frac{B^2}{2}ch_0$$

が成立する.

証明: $ch(-) := \sum_{j=0}^{\infty} ch_j$, $e^{-B} := \sum_{l=0}^{\infty} e_l$ と表しておく. すると Cauchy 積より,

$$ch^B = e^{-B} ch = \sum_{k=0}^{\infty} \sum_{i=0}^k e_i \cdot ch_{k-i}$$

が成り立つ. よって $e^{-B} = 1 - B + \frac{B^2}{2} + (\text{高次の項})$ を踏まえると 2 次までの項の計算は,

$$ch^B = e^{-B} ch(\mathcal{E}) = ch_0 + (ch_1 - Bch_0) + (ch_2 - Bch_1 + \frac{B^2}{2}ch_0).$$

である. ■

これによって, $\mu_{\beta, \omega}$ の意味で (半) 安定であることと μ_{ω} -(半) 安定性が同値となることがわかる. 従って以下の定義を得る.

定義 4.4.9 (捩れ安定性)

非特異射影曲面 X および $B \in NS(X)_{\mathbb{R}}$, $\omega \in \text{Amp}_b R$ とする. 連接層 $\mathcal{F} \in \text{Coh}(X)$ の任意の真部分層 $0 \subsetneq \mathcal{E} \subsetneq \mathcal{F}$ が,

$$\mu_{\beta, \omega}(\mathcal{E}) < \mu_{\beta, \omega}(\mathcal{F}) \quad \text{または} \quad \mu_{\beta, \omega}(\mathcal{E}) = \mu_{\beta, \omega}(\mathcal{F}) \quad \text{かつ} \quad \frac{\chi(\mathcal{E})}{\text{rank}(\mathcal{E})} < (\text{resp. } \leq) \frac{\chi(\mathcal{E})}{\text{rank}(\mathcal{F})}$$

を満たすとき, \mathcal{F} は B, ω -捩れ (半) 安定 (B, ω -twisted (semi)stable) という.

4.5 K3 曲面の安定性条件

5 補足

参考文献

- [1] T. Bridgeland, Stability conditions on triangulated categories, *Ann. of Math. (2)*, 166 (2007), no. 2, 317–345, also [arXiv:math/0212237](#).
- [2] T. Bridgeland, Stability conditions on triangulated categories, *Ann. of Math. (2)*, 166 (2007), no. 2, 317–345, also [arXiv:math/0212237](#).
- [3] R. Hartshorne *Algebraic Geometry*, Springer (1977)
- [4] Emanuele Macrì. Stability conditions on curves. *Math. Res. Lett.*, 14(4):657–672, 2007. [arXiv:0705.3794](#).
- [5] A.L. Gorodentsev, S.A. Kuleshov and A.N. Rudakov, t-stabilities and t-structures on triangulated categories. (Russian) *Izv. Ross. Akad. Nauk Ser. Mat.* 68 (2004), no. 4, 117–150; translation in *Izv. Math.* 68 (2004), no. 4, 749–781, also [math.AG/0312442](#).
- [6]
- [7] 上野健爾, 「代数幾何 1,2,3」, 岩波講座現代数学の基礎シリーズ, 岩波書店 (2001)
- [8] Ryo Ohkawa *Moduli of Bridgeland semistable objects on \mathbb{P}^2* , <https://arxiv.org/abs/0812.1470v3>
- [9] A. Beilinson, J. Bernstein, P. Deligne, *Faisceaux Pervers*, *Asterisque* 100, Soc. Math de France (1983).
- [10] S. Yanagida, K. Yoshioka, Bridgeland’s stabilities on abelian surfaces, *Math. Z.*, 276 (2014), Issue 1-2, 571–610
- [11] D. Happel, I. Reiten and S. O. Smalø, Tilting in abelian categories and quasitilted algebras, *Mem. Amer. Math. Soc.* 120 (1996), no. 575.